

## 北谷町の遺跡（1）

町内には、平成22年2月に国遺跡指定された伊礼原遺跡を始め48ヶ所の遺跡が確認されています。  
これから、古い遺跡の順序で紹介していきます。

北谷町教育委員会  
社会教育課  
文化係 Tel 936-1234  
(内線342)

### 旧石器時代

#### <桃原洞穴遺跡(とうばるどうけついせき)>

最近、新聞を賑わせている石垣空港の白保竿根田原遺跡で発見された旧石器時代の人骨と同じ時代の人骨が北谷町の桃原洞穴遺跡（字吉原東新川原）でも昭和41年（1966年）に発見されています。

洞穴の入口は、沖縄市南桃原に所在し、洞穴内部の大半は、北谷町に位置しています。その洞穴からは、化石人骨が検出され完全な形ではなく、成人男性の頭蓋骨であり、放射性炭素年代で調べたところ、約一万六千年前のもので、「桃原洞人(とうばるどうじん)」と命名されました。

沖縄の化石人骨といえば「港川人」が有名ですが、桃原洞人も、同じ現代型ホモ・サピエンスの仲間です。

#### ▶ 北谷町位置と遺跡の位置



## 北谷町の遺跡（2） クマヤーガマ遺跡（籠もり洞穴）

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
TEL936-1234（内線342）

クマヤーガマ遺跡は、砂辺公民館から南西に約80メートル離れた所にあり、現在砂辺の拝所として地元住民に尊宗されています。鍾乳洞は三つの連結した空間の洞穴（ガマ）から形成され、入口は陥没したドリーネで縦に穴が開いています。

入口付近のガマでは先史時代の人々の痕跡があり、約五千年前（縄文前期）の縄文土器・約三千年前（縄文後期）の土器が出土しており、約二千五百年前（縄文晚期）になると墓所として利用され入口付近から人骨と副葬品（貝製品・ヒスイ玉など）が出土しています。

グスク時代（約八百～六百年前）には、青磁や白磁・ガラス玉が出土し、また鍾乳石柱には置かれた状態のシャコ貝の網の錘が35個も一括で発見されています。

沖縄戦では、住民の避難壕として使われ、約三百人余りの人々が避難したが死傷者はいなかったそうです。

このようにクマヤーガマ遺跡は、先史時代からグスク時代に利用されるだけでなく、避難場所や沖縄諸島の風葬や改葬の源流を考える上で重要な遺跡と言われています。

参考文献「北谷町史」第三巻（下）

► クマヤーガマ



► 鍾乳洞内部



▲北谷町域の文化財地図

## 北谷町の遺跡(3) 「砂辺貝塚」

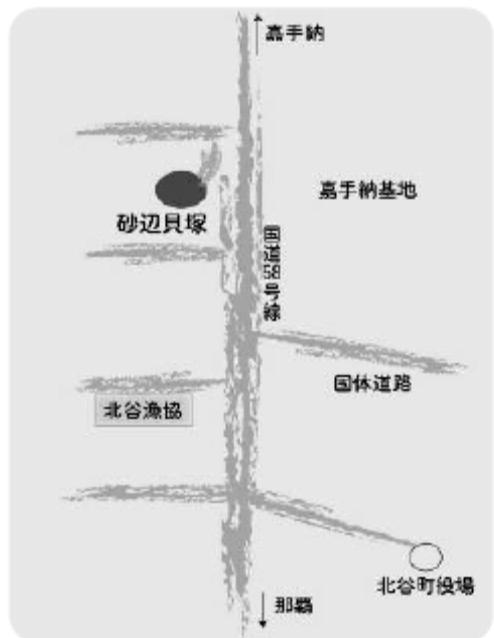
## =貝塚から発見された住居址=

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
TEL 936-1234  
(内線342)

砂辺集落の東側、標高38メートルの丘陵にある遺跡で、戦後米軍の採石の際に土器が採集され、遺跡発見の発端となりました。

本遺跡からは縄文後期（約3000年前）～晩期（約2500年前）、新しくはグスク時代（約800年前）の土器などが出土しており、さらに住居址も確認されている。

近世の石敷山道も検出されており、これは伝承に残る“加志原”に登る山道であると判断されている。また、牛骨が出土することから、それを行う祭祀儀礼場の近くの可能性も考えられている貴重な遺跡である。



### ▲北谷の地図



#### ▲砂辺貝塚出土の住居址



### ▲砂辺貝塚（現況）

## 北谷町の遺跡(4) 「砂辺サーク原遺跡」 =砂辺の古い集落=

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel 936-1234 (内線342)

昭和60年（1985年）、北谷浄水場への導水管工事のため埋蔵文化財が含まれる可能性があるとして、砂辺サーク原遺跡の発掘調査が開始されました。

この発掘での人工遺物は、10～13世紀ごろのカムイヤキと最も多く見つかっている鍋形と鉢形の形をしたグスク土器です。他には、羽口（鉄を溶解する際に空気を送る筒）・鉄（てつ）滓（さい）（鉄クズ）・滑石（かっせき）製品（石鍋など）、14～16世紀ごろの青磁（碗）・染付（碗・皿）、18世紀前後の沖縄産の陶器、獸魚骨や貝殻などの自然遺物も出土しました。

この遺跡では、直径20～30cmと直径50cm内外の大きさの違う柱穴が見つかり、その位置からここには8軒の高床式建物（倉庫）が建っていたと考えられ、その中で、もっとも大きな穴には石皿が土台として利用されていました。また、出土した遺物、遺構などから12～16世紀ごろと18世紀前後の2つの時期に古い砂辺の集落が確認されました。

石器では、石斧・すり石・敲（たた）き石が出土し、沖縄にはない黒曜石も見つかりました。それはもしかすると、もっと古い時代に九州からもたらされた石かもしれません。



柱穴跡



砂辺サーク原遺跡

## 北谷町の遺跡(5)

### 砂辺ウガン遺跡(字砂辺加志原) [遺跡内にある砂辺拝所]

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel 936-1234 (内線342)

本遺跡は、砂辺集落の南東側の標高22mのこんもりと樹木の茂った小丘陵に位置し、遺跡周辺は聖域とされている。

昭和54年に遺跡の範囲を踏査したところ、遺物が殿の位置する中央部の高台から南側斜面に露出した石灰岩基盤の窪みからグスク土器が採集された。このことから、グスク時代の遺跡と想定されたがその範囲はいまだ明確ではない。

また、遺跡の範囲と思われる場所には、砂辺の殿（トゥン）、神井戸（ヌールガー）、ノロ墓が存在する。

ヌールガーは、平安山ノロがウマチーの際にここで手足を洗ったとの伝承がある。

遺跡については、これから調査が期待される。



砂辺地図



ノロ墓

神井戸（ヌールガ）

## 北谷町の遺跡（6） 浜川ウガン遺跡（字浜川浜川千原）

### [祭祀遺跡]

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
TEL 936-1234（内線342）

浜川ウガン遺跡は、国道58号線と県道23号線（国体道路）の合流地点近くにあり、浜川集落の南に位置し、長さ15m、幅10mの楕円形で、高さ10mあまりの楕円柱状に切りたった石灰岩塊が突出した場所である。

昔は岩だけが東西南北どこからでも見えていたようだが、現在では、アコウの大木におおわれ、小さな森のように見える。

『琉球国由来記』によると「島森ヨリアゲノ嶽」と称される拝所であり、南側に『龍宮神』と『殿之神』が建立され、現在でも拝みに来る人が絶えない場所である。

本遺跡の丘陵部の南側基部には、8～10世紀の貝塚が形成され、くびれ平底土器と、タカラガイを加工し、ペンダントとして使用されたと思われる貝製品が出土している。

これらの遺物が散在している緩斜面は、石灰岩が露頭しているのみで、楕円柱状の丘陵上部から投棄されたと仮定してみて、上面によじ登るのに困難なことと、頂上部は基盤が露頭した凹凸がはげしく、狭いことから、生活できる場所としては不適当と考えられ、当遺跡は生活址というよりは祭祀遺跡の可能性が高いと思われる。類例遺跡としては、伊是名村アギギタラ貝塚があげられ、時期的にも同時期の遺跡である。

平成16年に北谷町指定文化財第1号となった。



浜川ウガン  
(アコウの大木)



浜川ウガン



龍宮神・殿之神



浜川遺跡の地図

## 北谷町の遺跡（7） 「旧字桑江御願所」

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel936-1234（内線342）

「旧字桑江御願所」は、北谷高校の西側、ナルカ（奈留川）原の水源地近くに位置し、キャンプ桑江内に存在していた10ヶ所の拝所を合祀している。拝所について右側から紹介する。

- ①ニースファ：現在の御願所に位置し、伝承によると支那事変（日中戦争）の頃、竹山御嶽の神を遷して祀ったという。今でも旧桑江郷友会のヤクミ（世話係）数名によって、村人の安泰や健康祈願が行われている。
- ②竹山御嶽：伝承によれば、谷茶大主に攻められた、北谷グスクの大川按司が逃げ延びた所で、それ由縁する御嶽であるという。③土帝君・トン：『琉球国由来記』によれば、トンでは平安山ノロが四ウマチ（2月・3月・5月・6月ウマチ）をおこなうとある。土帝君では、戦前までニングワチャーの際に、シンムイ（お膳に大根、豆腐などを盛ったもの）を供えて豊作の祈願がおこなわれたという。④カンカ神：旧暦の12月7日には、カンカと称した悪霊侵入防除儀礼を行ったという。豚を屠殺解体し、村の入り口等に解体した部位を吊り下げ、悪霊等の侵入を阻止した。現在ではこの行事は省略され、郷友会役員数名による拝みが行われている。⑤豊年神・サーターモー：かつての桑江集落南側位置していた。ここにはサーターイヤーが在ったため、サーターモーと呼んでいた。ここには、豊年神・遊神が祀られ旧暦の8月15日には「十五夜遊び」と称し、豊作を感謝する唄や踊りが奉納されたという。⑥遊神：「豊年神・サーターモー」を参照。⑦びじゅる：戦前の北谷トンネル（現在の国道58号線、謝苅交差点南側）北西側に位置していた。『北谷町史』によると、「このビジュルは、普天間權現とクサイ（特別な関係）といわれていた」とある。⑧産川（ンブガ）：戦前の桑江集落南側に位置し、かつてはこのカ一からウブミジ（産水）を汲んだという。⑨大荒神川・⑩村火神：今のところその性格については不明である。



▲左写真拡大図



▲旧字桑江御願所

## 北谷町の遺跡（速報） =でた！！沖縄県最古のイネ＝

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel936-1234（内線342）

今月は、去った3月12日の新聞（県内2紙）にも掲載されました、小堀原遺跡（くむいばるいせき）から出土したイネについて紹介します。

小堀原遺跡は、北谷町役場から北西に約100メートルの場所に位置し、主に弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡であります。区画整理事業に伴い、平成17年度から平成20年度にかけて発掘調査を行いました。

近年、遺跡から採取した土を詳細に調べたところ、イネやオオムギなどの栽培植物（炭化したイネなど）が発見されました。これらの植物が今から何年前のものなのか、それを調べるために科学的な分析を行った結果、なんと、沖縄県最古のもの（約1,000年前）である事が分かりました。

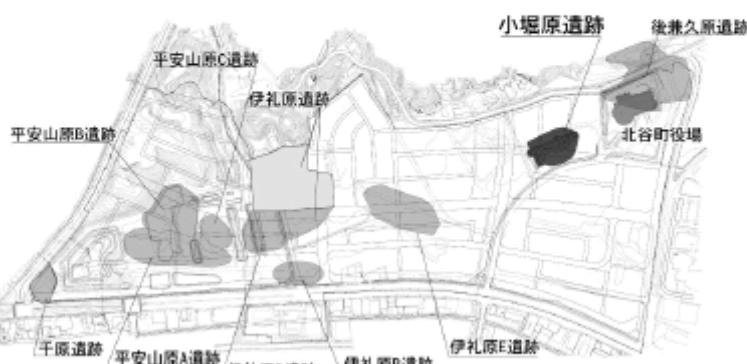
沖縄では、いつから農耕を始めたのか謎に包まれていますが、ひょっとすると、この頃からイネの栽培が始まったのかも知れませんね。



▲オオムギ



▲イネ



▲遺跡の位置図

## 北谷町の遺跡(8) =前原古島B遺跡(字桑江前原)=

北谷町教育委員会  
社会教育課  
文化係  
TEL 936-1234(内342)

前原古島B遺跡は、現在のキャンプ桑江（キャンプ・レスター）米海兵隊の海軍病院敷地内の南西角一帯に位置するグスク時代の遺跡である。当遺跡は、試掘調査により発見された遺跡で表土下約1.5メートルの砂地の層に厚さ約40センチの有機質（動植物、生物が発する炭素を主成分とした物質）層が確認された。

この有機質の層には、石灰岩礫が混ざり壺屋焼や喜名焼が発見され、さらにその下層では青磁の破片が発見された。

試掘時の状況からこの有機質層は、海軍病院の北東側へ広がる様相を示していた。このことから遺跡の範囲は戦前の桑江集落の方向まで広がり当時の集落位置と大よそ重なることが予測される。

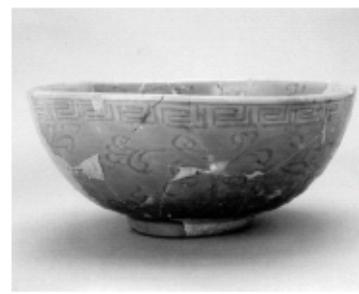
\*青磁とは、磁器と呼ばれる焼き物の種類の一つで、釉薬の主成分である灰に含まれる僅かな鉄分が高火度の還元焰焼成によって淡青色あるいは青緑色を呈するものを言う。



▲ 前原古島B遺跡の位置



▲ 戰前の桑江地区一帯

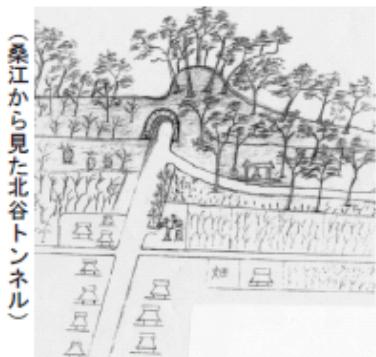


▲ 代表的な中国青磁

## 北谷町の遺跡(9) =池グスク=

北谷町教育委員会  
社会教育課  
文化係  
TEL 936-1234(内342)

今回紹介する遺跡は「池グスク」です。この遺跡は、北谷城の北側に白比川を挟む形で東西に延びる丘陵にあったそうですが、現在は、丘陵そのものが国道工事や宅地造成で破壊されて見ることができません。池グスクには、北谷城の出城として機能したという伝承や、慶長の役に関する攻防の伝承を残していますが、その範囲や施設、文物等の痕跡を示す資料はみられません。しかし、白比川上流の東側には丘陵の根幹が残存していて、両側は崖をなし、自然の要害をなしていたことがわかります。また、戦前には池グスクがあったとされる丘陵に通称「北谷トンネル」が掘られていました。「北谷村史」によると、トンネル開口以前は、一段高い丘陵部を西側から迂回する坂道があったようです。その丘陵部からは、北は残波岬、南には浦添市の城間岬が一望できたと記されています。



▲ チャタントンネル・ビジュル  
画・比嘉昌信氏



▲ 池グスクの位置



▲ 戰前の北谷トンネル  
(北谷から見た北谷トンネル)

## 北谷町の遺跡(10)

### ■長老山遺物散布地（字大村玉代勢原）■

北谷町教育委員会  
社会教育課  
文化係  
TEL936-1234(内342)

長老山遺物散布地は、キャンプ瑞慶覧の中に位置するグスク時代の遺跡で、須恵器やグスク土器が採集できる。発掘調査で内湾の貝マドモチウミニナが出土していることから、当時はマングローブの繁茂する環境が近くにあったと思われる。

長老山遺物散布地・北谷城・伝道集落・玉代勢原遺跡は、グスク時代の遺物のできる地域で北谷城を中心としたグスク時代の地域的背景を考える貴重な地点である。現在、長老山の一帯は、戦前の旧地形は止めていないが、こんもりとした樹木に覆われている。

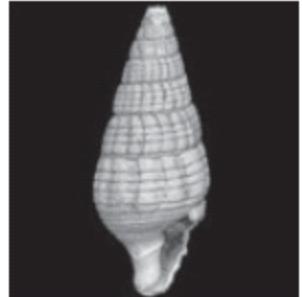
「長老山」の由来は、タメーシ（玉代勢）出身で、沖縄にはじめて臨済宗（りんざいしゅう）妙心寺派（みょうしんじは）を伝えたと言われる僧（南陽（なんよう）紹（しょう）弘（こう）彈（せん）師（し））があり、俗に北谷長老と呼ばれていた。その僧をはじめとして、ジュショーアイン（樹昌院）の住職を葬ったところだと言われている。この長老山では旧暦9月15日に旧北谷村が行う三大祭りの1つ長老祭が行われ現在もつづいている。長老山には、チャタン（北谷）やリンドー（伝道）の合祀所（ごうししょ）があり、米軍から立ち入り許可を得て、拝みに行くことができる。また、長老山入口の石碑や階段は、戦前のままである。



▲長老山の位置図



▲長老山の正面



▲マト'モチウミニナ

## 北谷町の遺跡（11） ＝玉代勢原遺跡＝

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
TEL 936-1234（内342）

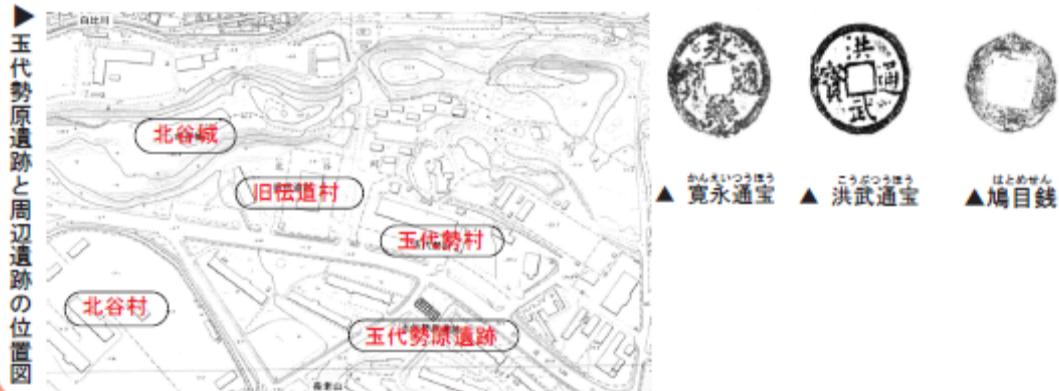
今回は、那覇防衛施設局がキャンプ瑞慶覧内に米軍隊舎を建築する際、事前の試掘調査で発見された玉代勢原遺跡を紹介します。遺跡周辺は、戦後の基地建設で削平されていました。

調査の結果、戦前の屋敷址が確認され、それよりも古い時期の多くの遺物が出土しました。

出土遺物の種類は、人工遺物と自然遺物に分けられ、人工遺物は土器（くびれ平底土器・グスク土器）、須恵器、磁器（中国産・日本産）、陶器（タイ産・沖縄産）、石器（打製石器・磨製石器）、古銭（中国・日本・鳩目銭）、貝製品（ヤコウガイ製）などがあり、自然遺物は貝、獸骨（ウシ・ウマ・イノシシ・イヌ・ブタ）があげられます。

これらの遺物が北谷城で出土した遺物（8～14世紀中頃）と類似していることから、本遺跡は北谷城と同時期な遺跡と考えられます。

北谷城と関連のある北谷三箇村（玉代勢・伝道・北谷）による北谷大綱引きの行事は今も受け継がれている。



## 北谷町の遺跡（12） ＝上勢頭・下勢頭古墓群＝

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel.936-1234（内342）

今回紹介する遺跡は上勢頭・下勢頭古墓群です。

上勢頭・下勢頭古墓群は、字上勢頭平安山伊森原・下勢頭平安山下勢頭原・伊礼伊森原の三つの小字にまたがる地域であります。

発掘調査の発端は、嘉手納飛行場内の米人家庭住宅建設に伴う事業で、発掘調査の結果、大型の亀甲墓・破風墓・中型の掘込墓・小型の岩穴墓からなる186基（内、仮墓50）の墓の存在が確認されました。

墓の作りは、基本的に谷間の石灰岩と石灰砂岩の互層が露出している硬い部分を天井とし、柔らかい石灰砂岩層を掘り込んで墓内として巧く利用され、掘り出された石灰砂岩を墓前に平坦に敷き、ハカヌナー（墓庭）として用いていました。

出土遺物は、厨子甕・雁・碗・カラカラ・花瓶・薬品瓶・金具・煙管・櫛・古銭など総数約200点ほどで中でも厨子甕が最も多く、70%を示し、厨子甕の蓋の裏面のミガチを見ると道光・同治・光諸の中国年号がみられることから19世紀の初頭から墓地として使用されたことがわかります。

以上のことから、上勢頭・下勢頭古墓群は18世紀以後、首里・那覇の人々が入植した屋取村落の人々が集中的に使用した墓群であることが明らかになりました。

▶ 上勢頭・下勢頭古墓群



▶ 出土厨子甕・蓋実測図



## 北谷町の遺跡（13）

### =山川原古墓群=

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
TEL 936-1234 (内342)

今回紹介する「山川原古墓群」は、キャンプ瑞慶覧内に所在し北谷城のある丘陵部東側に位置する古墓群です。

墓も埋蔵文化財として認識されてきている近年、私たちの祖先が築き上げてきた歴史を解明することのできる貴重な文化財です。

本遺跡は、北谷三箇と称された字北谷・玉代勢・伝道集落に暮らしていた人達の墓で、全て琉球石灰岩の岩盤を掘削し横穴を彫り込んで墓室を造った墓（方言名：フインチャー）である。墓室内からは蔵骨器（方言名：ジーシガーミ）や副葬品などの遺物が出土しました。さらに蔵骨器に納められていない状態の人骨2体も検出されています。墓から検出された蔵骨器である厨子甕に記された銘書をみると17世紀中から戦前までの約260年の歴史を持つ古墓群であることがわかりました。



## 国の登録文化財として答申される

平成23年12月9日に開催された国の文化審議会において、あしひなー公園内に（うちなあ家として）移築復元された「旧目取真家住宅の主屋」と「旧崎原家のふーる」が国の登録文化財として文部科学大臣に答申されました。（今回の登録で、沖縄県の登録件数は75件となる。）



▲旧目取真家の主屋



▲旧崎原家のふーる

### ○登録有形文化財（とうろくゆうけいぶんかざい）とは、

1996年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことである。登録対象は当初は建造物に限られていたが、2004年の文化財保護法改正により建造物以外の有形文化財も登録対象となっている。登録物件は近代（明治以降）に建造・製作されたものが主であるが、江戸時代のものも登録対象になっている。

## 2000～1500年前の貝塚

平安山原C遺跡で、弥生時代～平安時代頃の貝塚が発見されました。

この貝塚の地層をそのままの状態で、接着剤を浸透させて布に固定して剥ぎ取ったものに保存処理と額装を行い、北谷町役場1階の町民ギャラリーに展示しました。



▲部分採取箇所

貝塚とは、貝類の殻や魚骨・獸骨など日常生活の食べかす(食料残滓)や土器、石器、貝器、骨器などさまざまな物が廃棄され層をなして堆積した状態の地層です。

下から古い順に堆積しているので、その中に含まれている出土品を調べることで、自然環境など当時の食生活や生業活動に関するさまざまなことをることができます。

平安山原C遺跡は、平成21年度に桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査として記録保存されました。  
(社会教育課文化係)



▲北谷町役場1階町民ギャラリーにて展示しています。

### 北谷町の遺跡（14）

#### =前原古島A遺跡=

北谷町教育委員会  
社会教育課 文化係  
Tel.936-1234 (内342)

今回は、前原古島A遺跡を紹介します。前原古島A遺跡は、キャンプ桑江南側の米軍小学校建設に係る試掘調査の際に発見された遺跡で、現在の北谷町役場と米海軍病院の間に位置します。

試掘調査では、表土下1.5mの砂地から幅1.5mの範囲にわたり人頭大の石灰岩礫が集中して見つかり、その礫内には近世の陶磁器のほか獸骨等が混在していました。

また、礫の下部からは、喜名焼と呼ばれる焼き物(陶器)が出土しており、今から約340年前(1670年)には読谷村字喜名で焼かれていたことが判っています。

これらのことから、前原古島A遺跡は18世紀後半期の古集落と考えられます。

►遺跡の位置



►喜名焼  
(壺)



►喜名焼  
(瓶子)



参考写真：読谷村教育委員会「掘り出された喜名焼古窯」より